

# 2045年を生き抜くために

県教育庁教育次長

池 永 亘



2045年。今から25年後はどんな世界だろうか。日本の人口は、国立社会保障・人口問題研究所によれば、約1億600万人と推計されている。今より約2000万人減少する。若年層の割合は減少し、高齢層の割合は増加する。若年層が高齢層を支える構図は一層顕著となり、若年層の税や介護などの負担がさらに高まっていくだろう。

そして、ITの進歩により技術革新は加速度的に進んでいく。2045年という年は、AIなどの技術それ自体が、人間より賢い知能を生み出すことが可能となる年「技術的特異点（シンギュラリティ）」と予想する研究者もいる。経済活動やサービスがコンピュータやアンドロイドなどの機械に代用され、スイッチひとつで社会生活が成り立つようになっていくかもしれない。極論すれば、人間は家にいるだけで、すべての思考と行動は、人工的な知能の指示を受けて行う可能性すらある。まさに映画「ブレードランナー」や「トータル・リコール」の世界だ。それはそれでワクワクするが、これからの子どもたちが社会の価値観や仕組みがすっかり変わってしまう可能性がある2045年という時代を生

き抜いていくためには、どんな資質が必要だろうか。

専門家によれば、激しい変化に耐え、未知のものにも冷静に対応できる「しなやかでバランスのとれた心」を持つことだそう。

こうした心の柔軟性は、どうすれば得られるのか。私は、思考力や判断力を高めることも必要だが、苦手なこと、避けて通りたいことにも積極的に関わり、できるだけ多くのことを直接体験し、自分自身の精神的耐性を高めていくことで身につくものと思っている。

私には二歳になる孫が二人いる。2045年には27歳だ。自分の意思で決断しなくても、コンピュータが生きる道を判断してくれる時代かもしれない。そんな予測もつかない時代を生き抜くために、孫だけでなく、すべての子どもたちに、多くの人との出会いや様々な体験を通して自分で考える力と自分自身を見失わないしなやかな心を持つてもらいたい。

孫と関わるが増え、私にできることは何かと考えていた今年4月、今の職を拝命した。これを良い機会と捉え、子どもたちのためにできることは何かと、今精一杯がき続けているところだ。